

## 小論文の書き方

浅野幸治

小論文とは小さな論文のことである。「小さな」とはこの場合、分量が小さいという意味で、具体的には字数が1,000字～3,000字程度のものを小論文と言う。分量こそ小さいものの、小論文も立派に論文の一種であり、論文を書く時と同じ心得が小論文を書く場合にも必要である。

### 1、論文とは何か

#### (1)、論文は感想文ではない。

感想文とは、自分の感想を書くものであり、感想とは自分の心の中で感じたこと・思ったことである。言い換えると、感想文とは自分の心の状態について述べるものである。しかし、日記を書いたり親しい友人に手紙を書いたりする場合ならいざ知らず、不特定多数の読み手、赤の他人である読み手は、書き手がどういう心の状態にあるかということに何の興味もない。読み手が論文を読んでもくれるのは、論文が読み手にとっても関心のある事柄、読み手と書き手にとって共通の問題に関わるからである。

この共通の問題とは、事実に関わるか、または我々の選択・行為に関わる。例えばAさんがしたことの結果としてBさんが亡くなったとしよう。この場合、Aさんのしたことが殺人であるのか過失致死であるのか正当防衛であるのかは、事実に関わる問題である。そして殺人であった場合に、刑罰として死刑を相当とするのか無期懲役を相当とするのかどれだけの量刑を相当とするのかは我々が選択する問題である。もちろん、事実に関わるようでありながら実は我々の選択にも関わるような問題や、反対に我々の選択に関わるようでありながら実は事実にも関わる問題もある。例えばダイオキシンの安全基準は、危険か安全かという客観的事実に関わっているようでありながら、実はどれだけの危険性を我々が容認するかという選択の問題

題でもあるし、脳死移植の是非は、我々が脳死移植をするか否かという選択の問題であると同時に脳死が人の死かという事実問題にも大きく関わる。

このように共通の問題とは書き手と読み手とが共通に論じることができるような問題であり、共通の問題について論じる場が論文である。したがって、論文を通じて、書き手と読み手は同じ問題について考え、意見を交換し対話することが可能になる。

## **(2)、論文には一定の主張がある。**

上で述べたように、論文は書き手と読み手の共通の問題に関わる。この共通の問題について書き手は何か言いたいことがある。言いたいことがあるから論文を書くのであって、言いたいことが何もなければ論文を書く必要もない。書き手が言いたいこと、これが書き手の意見であり主張であり、論文の中で一番大事な部分である。

また原則として、1つの論文の中では1つの主張を述べる。言いたいことが2つある場合には2つ別々の論文を書けばよいからである。

## **(3)、その主張のために、議論を述べる。**

たとえ共通の問題に関わっていても、論文の中で書き手が自分の意見・主張を述べるだけであれば、そのような論文は読み手にとってほとんど何も得る所がない。書き手がかくかくの意見を持っている、ということを知ることができるだけである。それでは、読み手が得る情報は共通の問題に関わるというよりも書き手個人に関わり、論文が論文でなくなってしまう。

書き手から見れば、論文は単に自分の意見を述べるだけのものではなく、自分の意見を主張する場であり、読み手を説得することを狙いとする。ここで読み手を説得するとは、自分の意見の正当性を読み手にも認めてもらうことである。そのために書き手は言葉を尽くし理を尽くして、自分の主張の正しさを論じる。論じるとは、簡単に言うと、自分の主張の正しさを分かりやすく——いちいち何故かという点に立ち返って——説明することである。

#### (4)、議論とは何か。

議論とは、通常3つ以上の文を並べたものである。最も単純な場合、議論は前提の文2つと結論の文1つとから成る。例えば、

- 1、すべての人間は死ぬ運命にある。
- 2、ソクラテスは人間である。
- 3、故に、ソクラテスは死ぬ運命にある。

といった具合である。この例のように、結論部が結論であることを明示するために「故に」「したがって」「だから」等の言葉を使うことが多い。こういった言葉は使わないことも可能だが、使った方が確かに議論の流れが分かりやすくなる。逆に、結論を先に述べて、その次に前提たる根拠を述べるのに「何故ならば」「というのは」等の言葉を使うこともできる。

#### (5)、積極的議論と批判的議論

おおまかに言って、議論には、積極的議論と批判的議論の2種を区別することができる。積極的議論とは、一定の根拠に基づいて自分の主張を積極的に述べるものである。他方、批判的議論とは、他人（論争相手）の主張を批判するものである。では、相手の主張を批判するにはどうすればよいか。相手も、その主張に対して「なぜか」と問われれば、「～だからだ」と理由をあげて説明するだろう。だから、相手の主張を批判するには、その主張を根拠付ける議論を批判すればよいのである。相手の議論を批判するとは、その議論の前提が正しくない、またはその前提からは相手の主張が必ずしも出てこないと論じることである。こうして相手の議論を批判すれば、相手の主張はその限りで根拠のないものとなる。根拠がなければ、相手の主張に賛同する理由もない。

このように積極的議論と批判的議論を区別したのは、批判的議論の重要性を強調するためである。そもそも書き手が自分の意見を主張する、しかも議論による根拠付けを行って主張することは、書き手とは対立する立場の存在を前提している。他人の立場に満足できないから、わざわざ自分の意見を主張するのである。このよう

に、自分の意見というのは、他人の立場との対立の中にある。だから、自分の意見が何であるかをはっきりさせるためには、それが何でないかを述べるのが非常に重要であり、かつ対立する立場を論破できるのでなければ、自分の主張に十分な説得力も生まれない。

言い換えると、論文には、「こうだ」という積極的主張の部分が絶対に不可欠だけでなく、「ああではない」という批判的部分もあることが是非とも望ましいのである。そうでなければ、自分の主張が他人の主張と対立するものとはならない。他人の主張も正しいかもしれないけれども、自分の主張も正しいという微温的な論文になってしまう。

## 2、論文の作法

上で述べたように、書き手は自分の言いたいことを伝え、その主張の正当性を説明して、読み手を説得するために論文を書く。ところが、論文とは、物理的に見た場合、紙である——但し、その紙にはインクの染みが付いている。では何故、紙に付いたインクの染みが書き手の考えを読み手に伝えることが可能なのか。それは、インクの染みがただでたらめに付いているのではなく、記号になっているからである。記号には一定の意味があり、記号と意味を結びつける一定の規則がある。したがって、書き手が自分の考えを記号化する際の規則と読み手が記号を解読する際の規則とが同じであって初めて、書き手の考えが読み手に伝わるのが可能である。

### (1)、日本語の論文は日本語で書く。

上では「記号」という抽象的な言い方をしたけれども、論文を書くための記号は言語記号であり、具体的には日本語である。したがって、日本語の論文は、日本語の規則に則って書くことが絶対に必須である。日本語の規則は、主として、2種類に分かれる——どのようなインクの染みが何を意味するのかに関わる規則（言葉の問題）と、言葉をどのように繋ぎ合わせたら文を作ることができるのかに関わる規則（文法の問題）とである。

(a)、正しい言葉を正しく使う。

日本語を侮るなかれ。アメリカ人が英語を知っているとは限らないように、日本人が日本語を知っているとも限らない。我々が知らない日本語の言葉もあるし、一応は知っていてもあやふやにしか知らない言葉もあるし、中には間違っ理解している言葉もあるかもしれない。では、どうしたらよいのか。国語辞典を引くことである。日本語の言葉の意味は、国語辞典から習うのが原則である。

この関連で言うと、漢字を間違っはいけない。ある言葉を書こうとしても、漢字を書き間違っると、別の言葉になってしまう。読み手にとって、書き手の考えを知る唯一の手がかりは、紙に付いたインクの染みだけである。したがって、書き手が例えば「制服」と書いたならば、それは制服という意味であって、征服という意味ではない。もし書き手が征服という意味で「制服」と書いたのだと言っても、そのような言い訳は通用しない。自分の考えを正しく表現することは、書き手の責任である。

さらに付け加えると、日本語の論文は日本語で書くのだから、英語を使っはいけない。したがって、「アイデンティティ」とか「アセスメント」のようなカタカナ語は、使うべきではない。読み手が英語を知っているとは限らないからである。論文を書く時に重要なことは、誰にでも理解してもらえるように簡単に分かりやすく書くことである。だから、すべての日本人が知っいるとは限らないようなカタカナ語は、使うべきではないのである。カタカナ語を使うべきでないのには、もう1つ理由がある。論文を書く際に最も大事なことは、自分の頭で考えて、自分の頭でよく納得したことだけを書くこと——別言すれば自分をごまかさないこと——である。したがって、自分の頭でよく分かっいる訳でもないのに何となく分かっような気になるカタカナ語を使うことは、厳に慎むべきなのである。

(b)、文法の問題とは、主として「てにをは」の問題である。

言葉を並べて文を作る際に重要なことは、それぞれの言葉が文の中で果たす役割をはっきりさせることである。言葉が文の中で果たす役割を指示するのが、「てに

をは」に代表される助詞である。したがって、助詞を間違えて使ってはいけない。文の意味がまったく違ったものになってしまうからである。実際には、「てにをは」を正しく使うことは、それほど難しいことではない。自分が書いた文を冷静に読み返してみればよい。もし助詞のおかしな使い方をしていれば、直ぐにそれと気が付く。もし助詞の正確な意味や使い方が分からない場合には、国語辞典で調べることができる。

(c)、日本語の文は通常、句点・丸「。」で終わり、文中の区切りは読点「、」で指示する。

言葉を並べて文を作る——より細かく言えば、文字を並べて文を作る。その際に、ただ文字を並べただけでは、どこから文が始まってどこで文が終わるのかが分からない。そこで、文の終わりを指し示すのが、句点「。」である。句点によって1つの文の終わりが示されれば、次の文の始まりも自ずから明らかになる。

文の中で一定の切れ目を指し示すのが、読点「、」である。読点は、適当に、付けても付けなくてもよい。単に文を読みやすく分かりやすくするために、付けるだけのものである。読点を付ける場合には、通常、文の構造の論理的切れ目または文を読む上での呼吸の切れ目に付ける。読点を多く付けすぎると、文が美しくなくなり、付けなさすぎると、文の息が非常に長く、読みづらくなる可能性がある。

## (2)、長い文を書かない。

長い文は、読み手にとって難しいだけでなく、書き手にとっても難しい。文が長いのは、多くのことが1つの文の中に詰め込まれているからである。そのように多くのことが渾然一体となっている場合、書き手自身の頭が混乱している可能性が高い。では、どうすればよいか。書き手の頭を整理することが必要である。具体的には、長い難しい文を短い簡単な文に分割する。その上で、文と文の間の論理的関係をはっきりさせる。はっきり言おう。長い文とは、4行以上にわたる文のことである。そのように長い文は、要注意。

文を書き連ねていく時、いくつかの文が一定の思想的まとまりを得た所で、1つ

の段落とする。1つの段落が終わった所で改行し、次の段落は、最初の文字を1字下げて書き始める。長い文が難しいように、長すぎる段落も分かりにくい。長すぎる段落とは、1頁以上にもおよぶ段落のことである。そのような長い段落は、分割した方が好ましい。

ここで、小論文の場合に、文字という要素から小論文という全体にいたるまでの構成単位を順に示しておけば、次のようになる。

文字→言葉→文→段落→節→小論文

つまり、文字が集まって言葉となり、言葉が集まって文となり、文が集まって段落となり、段落が集まって節となり、節が集まって小論文となる。節は段落よりも大きな思想的まとまりであり、小論文は通常、2つか3つか4つ程度の節から構成される。

### (3)、主観的な文を書かない。

ここで「主観的な文」ということで意味しているのは、書き手が自分一人で分かっているような文、しかし読み手にとっては訳のわからない文のことである。そのような文の典型例は、主語が省略された文である。文とは「なにがどうした」ということを述べるものであり、文を構成する最も重要な要素は主語と述語である。だから、主語が省略してある文は、読み手から見た場合、何について述べているのか分からないことが多い。書き手が暗黙の前提としていることが、読み手に共有されていないのである。それはなにも読み手が馬鹿だからではない。読み手は、書き手が暗黙の前提としていることを知らないだけである。ところが、論文とは、書き手の頭の中にあることを知らない人に向かって、書き手の考えを伝えるものなのである。だから、たとえ書き手にとっては当たり前と思われたとしても、文の主語は安易に省略してはいけない。

### (4)、引用は鉤括弧「」で括る。

自分が書いた文と他人が書いた文とを明確に区別する。そのために、他人の文を引用する時には、他人の文を鉤括弧「」で括ることによって、それが引用であるこ

とを明示する。

引用は最低限に控える。引用を多く使えば、それだけ論文が「自分が書いたもの」とは言えなくなる。また、字数が制限されているので、引用に字数を使った分だけ自分で使える字数が減り、自分で書く議論が内容的に貧困になる。

### 3、補遺——日本語の心得

虹は何色から成るだろうか。虹を4色にしか区別しない言語を持つ人にとっては、虹は4色でしかない。それに較べて、虹を7色に区別する言語を持つ人は、感受性がより豊かであり鑑識眼が鋭いと言ってよい。雨や雪についても喜びや悲しみについてもその他何についても、語彙が多いということは、それだけ「違いが分かる」ということなのである。だから語彙を豊かにすることは非常に重要である。

言葉は心を養う。言葉は心の糧なので、よく噛みしめ味わうようにする。